

## 第 8 期 千代田区一般廃棄物減量等推進審議会での意見要約

## 1. ごみの発生抑制

## (第 1 回審議会意見)

## 【井出委員】

厨芥類の生ごみを減らす取り組みは行わないのか。例えば渋谷区ではコムハム菌を使用して生ごみの 98%を二酸化炭素と水にする実証実験を 2021 年から行っている。同じ都市部の千代田区でもできるはずでは。事業系の生ごみのリサイクルは実施していかないのか。

## 【座長】

フードドライブを行うことによるCO<sub>2</sub>の削減量の計算をし、食品ロスのデータと同時に公表してはどうか。

## 【副座長】

ごみの発生抑制やリサイクル等に関しては、もう意識を高めるような取り組みや倫理観に訴えかけるような取り組みは限界にきている。そのようなものはもうやめにして、条例等の制度的なものを作り、厳しくしていく必要があるのではないか。

## 【井出委員】

食品ロスに関する情報提供・コミュニケーションの件で、やはりコストや数字、身近な食品で示す方がわかりやすいのではないかと。例えば京都市では市民に啓発する際、数字はわかりにくいと、ミニトマト 6 個分等わかりやすく示している。

## (第 2 回審議会意見)

## 【井出委員】

杉並区で食品ロスの講演を行った際、杉並区は 1 人 1 日当たりの排出量が区内で 1 番少ないと区民の方が自負されていた。千代田区は 2 3 区内で何位程度なのか。

## 【井出委員】

公平性の観点から、少ないゴミを出す人も多く出す人も同じ税金を支払うのは不公平だと感じている。韓国では、この問題に対して生ごみポストを導入し、多く出した人は多く支払い、少なく出した人は少なく支払うというシステムを採用しており、このような仕組みはゴミの削減に対するモチベーションとなっている。

【梅原委員】

食品ロスについて、生ごみを分別してメタン発酵等エネルギーでの資源活用はできないのか。オランダのアムステルダムは、都市部でもメタン発酵で発生したガスを有効利用している。

また、女性活躍や共働きの増加により、食材の有効活用や配慮が難しくなりつつある現状がある。このような状況下で、個人の努力だけでなく、単身者でも参加しやすい分別回収のシステムを整備することが重要だと感じている。

【梅原委員】

若い世代との対話から明らかになったのは、衣料品や服が最も困難なごみであるということです。年間 100 万トンのごみのうち、約 7 割がリユースされずに廃棄されている現状がある。そのような困難なごみを有効活用することからスタートすることで、他の資源もより効果的に利用できる可能性があると感じる。

【井出委員】

生ごみの分別回収は田舎ではできるけど都市部ではできないという意見もあるが、ニューヨークや韓国でも実際行われており効果も出ている。日本でも渋谷区が 3 年前から実証実験も行っている。千代田区でもできるのではないかな。

## 2. 事業系ごみの削減

### (第1回審議会意見)

#### 【松田委員】

ホテルにおいては、コロナ禍前から9割程度客数は戻っている。今後、ホテル等から発生する厨芥類を含めたごみは大幅に増加することが見込まれる。その辺りも今後の取り組みの中に入れて頂きたい。

#### 【梅原委員】

事業系の紙ごみの再生利用率は、千代田区は標準的な水準なのか知りたい。もし低いのであれば、再生利用計画書を提出している2,000社の事業所は通常環境マネジメントシステムを導入しており、紙ごみ減は取り組んでいると思うので、その辺りの状況をアンケート等で把握しているのか。

#### 【梅原委員】

事業系ごみについて、昼間人口に対してどの程度の排出があったのかという原単位は把握しているのか。指標を原単位で捉えるということも計画を考える上で非常に重要となる。公表されていない資料で検討しているものがあれば教えて頂きたい。

#### 【事務局】

原単位については、コロナ禍の時ではなく、直近のデータを使いながら、働き方がどのように変わったかをどう評価するかを分析していく必要があると考えている。

#### 【座長】

京都市では、事業系ごみに関して、減量義務化の条例がある。そのようなことも参考にしてはどうか。

### (第2回審議会意見)

#### 【藤井委員】

事業ごみの削減が大きな課題であり、千代田区の特徴の一つと感じている。小規模な事業者は収集業者に依頼することが難しく、区のシール制度は一部の救済策になっていますが、実際には収集業者もリソースに限界がある。収集業者は可燃ごみやリサイクル可能な資源に限定して収集しており、それ以外のごみの収集にはコストがかかるため、実際には収集できないことが多い。この問題に対処するためには、行政が介入して有価物を収集し、その収益を事業費用に充てる必要がある。行政と業者の協力体制を構築し、事業ごみの削減と資源化に取り組む必要があると考えている。

#### 【藤井委員】

ごみを減らしていくことを考えれば、事業系ごみの分別を進めていかざるを得ないのでは。ただ、分別にはコストがかかるため、本当にやる気があるのならばお金をかけて分別する体制を作るべきでは。

【松田委員】

事業者への意識改革や取組の具体化による削減が課題として挙げられているが、家庭ごみと同様に、なぜ削減する必要があるのかの理由や、区の手組みへの協力や PR が不十分であると感じている。

事業者に対しては、具体的なミッションや取組みのスケジュールを示し、部門ごとに適切な施策を提案することが重要ではないか。例えば、製造業や小売業などのカテゴリーごとに、商習慣の見直しやフードバンクとの連携などの具体的な目標を提示することで、取組みを促進できる。また、自助努力として、生ごみの削減に取り組む事例を紹介し、経営的なメリットを PR することも重要では。SDGs の観点から、先進的な事例を紹介し、他の事業者との連携を促進することで、取組みの推進を図るべきでは。

### 3. 資源循環型社会の形成・推進

(第1回審議会意見)

【平野委員】

近隣区からの不法投棄(油の一斗缶等)がかなり問題となっている。不法投棄の取り締まりについても対策を講じる必要がある。例えば、清掃事務所と一般業者がもう少し提携・補完できるようなシステムづくり等

## 4. 環境コミュニティの形成・普及啓発と環境学習の充実

### (第1回審議会意見)

#### 【座長】

区民にとっても、事業所にとっても明確に伝えていくことが重要である。

#### 【梅原委員】

食品ロス計画について、非常に充実した内容ではあるかと思うが、やはり分別等は手間がかかって面倒で、コストもかかると捉えられる。そこで、「DO! NUTS TOKYO」でもやっているような、もっとわくわくと楽しく取り組めることにしていかなないとゼロエミッションは進んでいかないのでは。千代田区には研究所・教育機関も多くあるため、巻き込んで日本版ナッジ・ユニット（BEST）のようにアイデアを出し合って取り組みを考えていくことも必要ではないか。

#### 【副座長】

食品ロスに関する取り組みは、様々な大学や高校でも関心があり、コンペ等も積極的に行われています。その中で良いアイデアがあれば、区の施策の中にも入れていってもよいのではないかと。これは環境教育の一環ですので家庭系ごみを中心にはなるが、企業にも入っていただき進めていくのも一つのやり方としてあるのではないかと。

### (第2回審議会意見)

#### 【藤井委員】

分別率が上がらない理由は、なぜ分別が必要なのかやごみ削減の重要性が理解されていないことが挙げられる。特に、二十三区の最終処分場はあと50年と言われており、このままごみを処分し続けることで処分場が使い尽くされ、処分場所がなくなるという意識が低い。二十三区においては、収集は区、焼却処理は一部事務組合、埋立は東京都と管轄の違いや意識の低さも影響しており、このままだと住めなくなりますという理論での啓発活動が必要と思う。

#### 【副座長】

大学のゼミで、学生たちと一緒に一般廃棄物処理計画に向けた取り組みを探った経験がある。学生たちは、企業や自治体での実務に関するイメージがまだ不明瞭であるが、教育との連携や大学との協力が重要であるとの意見が多かった。また、「分けちよ!」に関する議論があり、現状は使いにくいいため、学生は使いやすいアプリの開発を提案していた。

また、個別施策と大きな目標の関連性や取り組みの大小について、PDCAサイクルの管理や成果の達成についても検討が必要だと感じました。結論として、区民も同様の関心を持っている可能性があり、議論を深めていくことが重要である。

#### 【井出委員】

目標数値の見せ方であるが、単に383グラムと言われても区民はよくわからないのでは。例えば、杉並

区では東京23区内では最もごみの排出が少ないということがモチベーションになっている。そのようにわかりやすい指標のようなものが必要なのでは。例えば目標を分かりやすく分解し食べ物●●1個分等示せばどうか。

【小木曾委員】

区民の皆様や町会の方々は、ごみに対する意識が高いと感じている。そのため、情報発信や広報活動の方法を工夫し、テーマを分かりやすくすることで、効果的な啓発ができると考えている。例えば、「分けちよ！」などのツールを活用して、高齢者や独身者、単身赴任者などにも情報を届けることが重要では。具体的には、掲示板やポスターを活用したり、学校の生徒を介して情報を伝えたりする方法が考えられる。こうした末端での取り組みを通じて、情報が効果的に伝わることを期待できる。